

# 初めてプリセプターを経験した看護師の

## 自己効力感を維持した思い

三品 亜衣 Ai MISHINA 織田 未咲 Misaki ODA

北見赤十字病院 看護部

Nursing Department, Kitami Red Cross Hospital

要旨：【目的】プリセプターを初めて担う看護師が、自己効力感を維持し、どのような思いを抱き役割を遂行してきたのかを明らかにする。【方法】質的記述的研究デザイン。A病院に勤務する看護師で、平成26年～28年度に初めてプリセプターを経験した看護師6名に同意を得た。研究参加者に、どのような思いを抱きながらプリセプター役割を遂行したか、半構成的面接を60～90分程度で実施した。インタビュー内容をICレコーダーに録音し、思いに沿って逐語録に起こした。起こした内容を指導者と検討して分析を行った。【結果】「プリセプターになる前の不安」「実際に経験することで不安な思いが軽減した」「何かあったら先輩に相談」「共感して欲しい思い」「プリセプターを続けられた原動力」「やりがい、周りが見えるようになった自分」という語りが得られた。【結論】1.不安や自分には出来ないという否定的な思い、プリセプターの成長からやりがいを感じ、自身の知識や技術面の成長、プリセプターを経験したことで自信に繋がった肯定的な思いを抱いていた。2.先輩への相談、同期の存在、プリセプターの成長が自己効力感の「代理体験」「言語的説得」「遂行行動の達成」に繋がり、否定的感情を肯定的感情に変化させ、プリセプターの自己効力感を維持させた。

キーワード：プリセプター 自己効力感

## I. 序 論

私たちは看護師3年目に初めてプリセプターの役割を担った。一般に3年目看護師は専門領域の知識、技術の習得段階で、看護師として未熟な状態である。それに伴い私たち自身、プリセプターの役割を全うできるのかという不安が強い状態であった。竹村らの先行研究では、新人看護師プリセプターが抱えている「できない」という否定的感情がプリセプターシップ終了後、「やってよかった」等の肯定的感情に変化したとの結果が出ている。要因としては、様々な困難を抱えな

がらもプリセプターの成長や頑張りを感じたことで、指導することの楽しさ、喜びを知ることにつながったと述べられている(竹村・高橋・橋田他, 2006a, p112)。プリセプターという大きな役割を達成したことで、意欲の向上につながり、肯定的な認知に変化したものである。これは自己効力感の情報源の一つ「遂行行動の達成」であると考えられる。プリセプターを終えての達成感や自己効力感を調査した研究では、達成感をもっていた人は約30%、自己効力感をもっていたのは約18%でともに低率であったとの結果が出ている(鯉田, 2007, p93)。先行研究では、プリセプターを感じる

ストレスへの対処行動や支援体制が明らかにされているが、プリセプターの役割を担う看護師が自己効力感をどのように維持させてきたのかは具体的に示されていない。

本研究では自己効力感に焦点を当て、初めてプリセプターを経験した看護師は、どのような思いを抱きながら自己効力感を維持させ、後輩指導を行ってきたのか知りたいと考えた。また、自己効力感をどのように維持してきたのかを知ることで、プリセプター役割を遂行する手助けとなると考えた。さらに、プリセプター自身の自己効力感を維持させることで、精神的安定を図り、先輩看護師として新人看護師へ肯定的な感情で指導を行うことができるのではないかと考え、本研究に取り組むこととした。

## II. 研究目的

プリセプターを初めて担う看護師が、自己効力感を維持し、どのような思いを抱き役割を遂行してきたのかを明らかにする。

## III. 用語の操作的定義

自己効力感：自分が行おうと思う行為について、自分には実行できるという可能性の認知。

維持した思い：プリセプターを1年間経験したことで生じた感情や行動。

## IV. 研究方法

1. 研究デザイン：質的記述的研究デザイン
2. 研究参加者：A 病院に勤務する看護師で、平成 26 年～28 年度に初めてプリセプターを経験した看護師 6 名に同意を得た。
3. データ収集期間：平成 29 年 8 月～11 月まで。
4. データ収集方法：研究参加者に、どのような思いを抱きながらプリセプター役割を遂行したか、半構成的

面接を 60～90 分程度で実施した。

5. データ分析方法：インタビュー内容を IC レコーダーに録音し、思いに沿って逐語録に起こした。起こした内容を指導者と検討して分析を行った。

## V. 倫理的配慮

研究調査への協力は自由意思によるものとし、研究目的や方法、結果の処理について依頼文書及び口頭で説明した。調査への協力の有無による不利益を受けることがないこと、調査結果は研究の目的以外には使用しないこと、データの管理は記号化、数値化などの方法をとることにより個人が特定されないよう十分に配慮することを文書と口頭で説明した。また、調査中に辞退の申し出があった場合には、調査を中止できることを明示しておく。研究終了後にはデータは破棄し情報の流出を防止する。

## VI. 結果

1. 参加者の概要 研究参加者は 6 名、看護師経験年数は 4～6 年目。初回プリセプター経験年数は 3～4 年目であった。
2. 分析結果 インタビューで得られたデータを分析した結果、【プリセプターになる前の不安】【実際に経験することで不安な思いが軽減した】【何かあったら先輩に相談】【共感して欲しい思い】【プリセプターを続けられた原動力】【やりがい、周りが見えるようになった自分】という語りが得られた。「」は研究参加者の実際の言葉として以下に示す。

【プリセプターになる前の不安】では、「絶対自分にはできないと思っていました。自分のことですごく精一杯だったし、なんか知識もまだないし、自分が一年目の子に教えられるのかなっていう不安がすごく強かったです。」「無理だ、絶対出来ない、しか思わなかった、その時は。うーん、これからどうしようって思った。まだ教えてもらっている立場なのに。」という不安を参加者全員が語っていた。

【実際に経験することで不安な思いが軽減した】では、「まあ逆にでも言う、言うってことは、プリセプターをやってもいいレベルまで行ったのかなって、ちょっと考え方を改めて挑んだ感じはありますか。」「4年目だけど、プリセプターとして任せられるくらいになってきたのかなってのは感じました。」という前向きな語りが聞かれた。そして「なんか不安はやるにつれてなかった、なくなっていった感じですね。最初はどんな子が来るのかなとか、病棟になじめなかったらどうしようかなとか、成長出来なかったらどうしようとか不安がすごくいっぱいあったんですけど、やっていく中で、その不安が解消されていったので、だんだんその不安はなくなりました。」と初めてプリセプターを任命されたことで抱いていた不安が、実際に経験することで軽減していったという語り得られた。

【何かあったら先輩に相談】では、「うーん、これも相談していたかなー、先輩たちに。(中略)愚痴かつ相談みたいな。あんたもそうだったよー、みたいな。これはそういう過程を経て育っていくのだから、なんだろう、周りに相談しながら解決していった。」「一番初めは、なんかこう私が全部やらなきゃって思っていたのですよね。(中略)でもチームみんなが指導して育てていくものだから、別に全部やる必要はないってのを先輩に言われて、でちょっと楽になったところもありますね。」という、先輩からの助言を受けることで精神的負担が軽減したと語られている。

【共感して欲しい思い】では、看護管理者への相談について、「なんか共感だったり、アドバイスだったり、私はこう思うとかそういう部分を聞きたいのに、そういう課題みたいなを出されるから、(中略)言って後悔することの方が多かったから。」といった看護管理者に対し共感して欲しい思いが語られた。

【プリセプターを続けられた原動力】では、「いい先輩に会えた、いいプリセプターに会えたっていうことと、周りで支えてくれるチームの人がいたから、いい環境でプリセプターやらせてもらっていたなっていうところですかね。」「辞めたいなって思う時もあったけど、やって良かったかな。周りの先輩方と、プリセ

プティーに救われたって感じかな。」「同期が原動力だったなと思って。協力して頑張ってるって、常にそういう関係だったなって思うので、それが原動力だったと思います。」というプリセプターの頑張りや周囲のサポートを得ることで、プリセプターを続けることができたと語られていた。

【やりがい、周りが見えるようになった自分】では、「人を深く考えられるようにはなったのかなって。表面の出来事だけじゃなくて、(中略)具体的に聞いて、(中略)考えられるようには、少しなったかなって思う。」「自分発信でこう困っていることとか、悩みとかは言えるようになった感じがします。」「今、この子のプリセプターやれて私も成長出来て、いい経験になったなって、いい1年だったなと思います。」「たぶんプリセプターやらない1年より、プリセプターやった3年目の1年の方が絶対いろんな経験して、いろんな学びがあって、いろんな刺激があって、絶対自信ついてるなって思います。」「自分がリーダーで、自分のプリセプターに仕事を任せられるレベルまで達したのだったという。頼もしくなったなっていうぐらいかな。」「やって良かったのかなって自分も成長したのかなって。人に教える方法っていうのかな、言葉の発し方とか、(中略)あとは知識の復習とかにもなりました。そういう面ではプラスになったのかなってなりますね。」「スタッフの一員として働いているなって思った。(中略)プリセプターやって、じゃあ今後どうしていったらいいかなー、どうしていったらみんながやりやすいかなーとかを考えて、行動するようにはなったかな。」「やってよかったのは身近で成長を感じられたことですかね。」という、プリセプターの成長からやりがいを感じ、自身の知識や技術面の成長、プリセプターを経験したことでの自信に繋がったと語っている。

## Ⅶ. 考 察

自己効力感とはアルバート・バンデューラによる概念であり、「自分が行おうと思う行為について、自分には実行できるという可能性の認知」と定義されている。

人の行動は、「その行為を行えば良い結果が得られる」という予測に加えて、「自分にはその行為ができる」という予測、つまり「自信」も伴って実行に移される。

バンデューラは、前者の予測を「結果期待」、後者の予測を「効力期待」と呼んで区別している。特に、自己の効力期待に対する認知を自己効力感と呼び、人の行動選択に重要な役割を果たすとしている。対象の行動変容を促すためには、自己効力感を高めることが必要である。自己効力は「遂行行動の達成」「代理体験」「言語的説得」「生理的状态(情動喚起)」の4つの情報源によって規定されている。これらの4つの情報源を活用することは、対象の行動変容に向けて有効であると述べられている(佐藤,2009,p454)。今回のインタビューにて参加者全員が【プリセプターになる前の不安】を述べていた。

「臨床経験年数3年目の看護師は、自分の看護を主体的に展開する時期といわれているが、その看護の展開に当たっては3年目になっても先輩の支援を必要としており自信を持っていないことが推察された。」(佐藤・米澤・石綿他, 2011, p98)とされており、今回の参加者の語りと合致している。不安や自分にはできないという否定的感情が自己効力感の情報源である「情動喚起」に影響を及ぼし、参加者は自己効力感が低い状態からプリセプターを始めていることが推測される。先行研究では、プリセプター以外のスタッフの協力や支援システムがプリセプターシップの成功の鍵となっていると言われている。

プリセプターは病棟全体で新人教育をしているという連帯感を感じ、共同意識が芽生えることで、役割に対する負担感が軽減され、精神的ゆとりを持ちながらの新人指導を展開できていたことから、過剰な責任意識に陥ることなく役割を遂行することができたのではないかと述べている(竹村・高橋・橋田他, 2006b, p111)。また「プリセプターの役割遂行は、ある特定の支援によってではなく、多くの人間からの多種多様な支援によって支えられている、といったことも示唆された。」(種本, 2017, p149)とされている。参加者は身近な先輩や看護管理者へ相談をした結果、精神的

負担の軽減についても語られている。これは先輩方の経験を知り、肯定的な助言を受けることで、自己効力感の情報源である「代理体験」「言語的説得」を得ることになり、役割遂行を果たすことで、参加者の自己効力感を維持する要因となったことが考えられる。その結果、【実際に経験することで不安な思いが軽減した】という語りが得られたと思われる。

一方【共感して欲しい思い】の中に、看護管理者へ参加者自身が自己の精神的負担や不安について共感を求める参加者の語りがあり、それに対し看護管理者が課題のみを伝える場面があった。その場合、プリセプターが求める支援との相違が生じている。「言語的説得」には、暗示や自己教示を遂行行動の達成や代理的経験に補助的に付加することによって、自己効力感を上げたり下げたりすることができる効果があるとされている(坂野,2002,p6)。看護管理者の課題の意図がプリセプターに伝わっていない可能性があり、双方の思いのずれ違いが自己効力感を阻む要因となりうることが考えられた。山本らは、初めてプリセプターを担う臨床経験2~4年の看護師として似た悩みを持つ仲間同士で共に議論し、他者との意見の相違を確認する機会を得ることで、プリセプター役割自己評価が高まることにつながったとしている(山本・石田・清水他, 2015)。

また竹村らは、プリセプターは他者から努力を承認されたことで、自らのプリセプターシップを肯定的に捉えることができ、自己の成長をより感じることになり、気持ちの充実につながったと思われると言っている(竹村・高橋・橋田他, 2006c, p112)。**【プリセプターを続けられた原動力】**【やりがい、周りが見えるようになった自分】の中で、同期やプリセプティの存在について語られている。同期で思いを共有し情報交換することで「代理体験」をし、「言語的説得」を受けている。そして、プリセプティの成長を感じることで、プリセプターとしての役割を達成したという感覚を得て、それが「遂行行動の達成」へと繋がっていると言える。

参加者は不安を抱えながらも、対処行動をとり、プリセプター役割を遂行することで、やりがいや自己の

成長を感じることができていた。先輩への相談、同期の存在、プリセプティ어의成長が、自己効力感の「代理体験」「言語的説得」「遂行行動の達成」に繋がり、否定的感情を肯定的感情に変化させ、プリセプターの自己効力感を維持させることができたと考えられる。

集 18回,p149.

山本京子・石田貞代・清水かすみ・花田富美子(2015),「プリセプター看護師対象のアサーション・トレーニングプログラム」の介入効果.日本看護学会論文集:看護管理(1343-0025),24 卷 1 号,p25-30

## VIII. 結 論

1.不安や自分には出来ないという否定的な思い、プリセプティ어의成長からやりがいを感じ、自身の知識や技術面の成長、プリセプターを経験したことで自信に繋がった肯定的な思いを抱いていた。

2.先輩への相談、同期の存在、プリセプティ어의成長が自己効力感の「代理体験」「言語的説得」「遂行行動の達成」に繋がり、否定的感情を肯定的感情に変化させ、プリセプターの自己効力感を維持させた。

## 文 献

尾立篤子・梅崎奈美・志田祐子(2013),新人看護師を迎えるプリセプターが抱く指導者像.防御衛生,60 卷 9-10 号,p153-158.

鯉田浩子・井藤ゆか・寺下浩美・藤原朋子・西野弘員(2007),プリセプター教育の現状と今後の教育・支援体制の在り方 プリセプターの不安・達成感の把握から.日本看護学会論文集:看護総合,38 号,p92-93.

坂野雄二・前田基成(2002),セルフ・エフィカシーの臨床心理学.(株)北大路書房

佐藤英子(2009),中範囲理論入門 第 2 版.日総研出版  
佐藤佳子・米澤弘恵・石綿啓子・鈴木明美・遠藤恭子(2011),プリセプター看護師における役割受容の臨床経験年数別の比較.獨協医科大学看護学部紀要(1883-0005),4 卷,p89-100

竹村和巳・高橋里恵・橋田千恵子・岡部今朝美(2006),精神科新人プリセプターの達成感.日本看護学会論文集:精神看護,36 号,p110-112.

種本純一(2017),プリセプター看護師の役割遂行状況に及ぼす影響要因.日本赤十字看護学会学術集会講演

